

ヨハネの手紙第一5章11-13節 「御子にある永遠のいのち」

1A 永遠の命 11

2A 御子にある命 12

3A 命を持っている確信 13

本文

ヨハネの手紙第一5章を開いてください、今晚は 11 節から 13 節を見ます。この手紙のまとめのような箇所です。「¹¹ その証しとは、神が私たちに永遠のいのちを与えてくださったということ、そして、そのいのちが御子のうちにあるということです。¹² 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。¹³ 神の御子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです。」

御霊が、そして父なる神ご自身が御子について証しをしておられるということ、私たちは見てきました。そこで、その証しとは何か？ということ、明確に言葉にしているのがこの箇所です。

1A 永遠の命 11

^{11a} その証しとは、神が私たちに永遠のいのちを与えてくださったということ

「永遠のいのち」を神が与えてくださったこと、これが神の証しなのだということです。本当にこれはすばらしいことです。私は、二度、このことを意識したことではっきり覚えていることがあります。「小学生の時、自分が今、生きているが、生まれる前はずっと意識もなにもなく存在していなかった。けれども、それが死んだらまた永遠に続くことになるのか？」そう思って、恐ろしくもなり、空しくなりました。そしてもう一回は、信仰をもって間もない時です。信じる前は、死んだら終わりと思っていました。すると、ある時に、「死んだら終わりって、自分は何を考えていたのだろうか？死後のいのち、当たり前じゃん、あるじゃん。」と意識が変わっているのに気づいたのです。

神は、私たちが生まれる前も、また死んだ後も、ご自分の愛の中で私たちを知っておられたことを知ることは慰められます。「エペ 1:4-5 すなわち神は、世界の基が置かれる前から、この方において私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。神はみこころの良しとするところにしがたって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。」神は、私が生を受ける前から、実に世界の基が置かれる前から、愛し、選び、永遠に共に生きるご自分の子にすることを決めておられました。

こうして、永遠のいのちというのは、単に命が物理的に続くということ以上のものを含みます。今、

自分が生きているということに意味を与えるのです。この地上に生きる命のみを見て、そこに意味を見つけようとして努力していけば、虚しさが残るだけです。それをよく表している書物が、伝道者の書です。彼は神から知恵が与えられていました。それで学問の世界を追求しました。虚しさが残りました。それで快樂を味わいました。毎晩、パーティーを開いたのでしょう。「笑いか、私は言う。それは狂気だ。」と言っています。そして、自分の邸宅の事業にとりかかりました。また、金銀を集め、しもべもたくさん得て、そばめもたくさんいましたが、虚しいです。日の下にあることにあらゆる追及をしましたが、虚しかったのです。彼は結論に至ります。「12:13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」父ダビデから教えられたところに戻りました。神にあるいのち、その関係にあって始めて命があります。

イエス様は、今地上にある、こうしたいのちと、とこしえのいのちの対比を行われています。「マコ 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」このいのちが、日の下にある命です。そこになんとか意味付けをしよう、いのちを救おうとすれば、失う、つまり空しいだけだということです。けれども、イエス様とその福音のために、そのいのちを救うことをやめれば、逆にまことのいのちを見いだす、永遠のいのちです。

11b **そして、そのいのちが御子のうちにあるということです。**

これこそが、御霊の証し、そして神ご自身の証しです。その永遠のいのちが、神の御子のうちにあるのだということです。もうこれは理屈ではなく、そうなのだという証言に基づいています。「Iヨハ 1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、2 このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。」

イエス様は何度となく、ご自身にいのちがあることをお語りになっていました。ヨハネによる福音書は、まさにそのことの証言集と言っても過言ではありません。サマリアの女に対して、こう言われました。「ヨハ 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」四千人の給食の奇跡の後で、イエス様を追いかけている群衆に対して、「ヨハ 6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」そして、多くの弟子と言われていた人々が、去って行ってしまった時に、ペテロはイエス様に、「ヨハ 6:68 主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」と言うんですね。イエスご自身が、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」と言われました(14:6)。

このいのちについて、比較しようのない優れたものものとして表現されています。このいのちに

は、喜びがあります。けれども、キリストのいのちにある喜びは、「ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」と使徒ペテロは表現しています（Ⅰペテ 1:8）。そして、平安というのはこの地上にもあるのですが、「すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」とパウロは言いました（ピリピ 4:7）。そして愛については、「人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができます様に。」と言っています！（エペ 3:19）

このように、比較にしようのない優れたものは、やはり、永遠の分け前があるのです。やはりこの世におけるものからではなく、目に見えないところから来ており、この世の有様が崩れ去っても残っているものです。「Ⅱコリ 4:18 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」そしてヨハネ第一では、こうありました。「2:17 世と世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」そして、このいのちが地上に生きる私たちが得ることができるのは、肉体を取られたいのち、御子がおられるからです。

2A 御子にある命 12

そこでヨハネは続けて言います、「¹² 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。」

いのちが御子の内にあることを示す、これほど強い言葉がありません。永遠のいのちが、御子と切り離すことが全くできないことを示しています。ここで思い出すのは、金持ちの青年です。「ルカ 18:18 何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」何をしたら永遠のいのちを受け継ぐことができるか？と聞いているんですね。けれども、イエス様に言われたことを行うことができないと判断した彼は、非常に悲しんで、その場を立ち去りました。神の戒めを守っていつて、その行き先が永遠のいのちなのだという理解を、この金持ち青年はしていました。けれども、その何を行うかという以前に、神とのつながり、この方との関係があって、戒めを行うものであって、何かを行ったから、永遠のいのちを得るものではありません。なので、この人はイエス様につまずいてしまいました。対して、ペテロなど弟子たちは、この方ご自身にいのちがあると信じていたのです。

イエス様は、永遠のいのちという、地上にあるものを超えたいのちが、肉体を取られたご自身にあることについて、ヤコブの見た、天のはしごの夢で言い表されました。「ヨハネ 1:51 まことに、まことに、あなたがたに言います。天が開けて、神の御使いが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見ることとなります。」ヤコブが天からのはしごを見て、天が地につながっているのを見ました。それは天から地に下って来た方、キリストを表しており、この方にあつて、天からのものを受け取ることができます。「エペ 1:3 神はキリストにあつて、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。」天上にある祝福が、キリストにあつてすべて持つことができるので

す。この方に、天からのいのち、永遠のいのちが隠されています。

そして、逆に「**神の御子を持たない者はいのちを持っていません。**」と断言しています。これは、今の多元的な社会ではかなり排他的に聞こえるでしょう。多元的とは、「すべての道は神に通じる」という見方です。いろいろな意見があるが、それはいろいろな側面を表していて、実は一つであるということです。確かに、非寛容という問題があり、自分と考えが違うからあなたは呪われなければならないという不寛容は、宗教的な熱狂の中にあるでしょう。けれども、寛容になることは、排他的であること全て捨てることではありません。御子から離れては、いのちはないのです。

例えば、イスラム教の根本真理がそれです。私たちが聖地旅行に行くなら、エルサレムの神殿の丘には、イスラム教の岩のドームがあります。かつてソロモンの神殿、またヘロデの神殿が建っていたところです。そのドームの中にはこんなことが刻まれています。「アッラーの他に神はなし、ムハンマドは、アッラーの使徒(預言者)である。」これは、イスラム教の信仰告白で、ムスリムになる時に唱えるものです。そして次にこう書いています。「イエスもまた預言者である。しかし、「神には子はいない。神は御産みなさらないし、御産れになられたのではない」と続きます。真っ向から、「神に御子がおられる」という私たちの信仰告白を否定しているものです。ということは、どんなにコーランにイエスのことやマリアのことが書かれていても、その神は私たちの神ではないということになります。「2:22b-23 御父と御子を否定する者、それが反キリストです。だれでも御子を否定する者は御父を持たず、御子を告白する者は御父を持っているのです。」¹

ヨハネが手紙を書いた背景の、グノーシス主義に影響された仮現説にしても、コーランに書かれているものにしても、神には御子がおり、この方が肉体を取られたところを否定したいのです。しかし、この奥義にこそ、私たちは永遠のいのちを見いだすことができる、というのが私たちの信仰なのです。そしてその信仰こそが、世に対する勝利です(Iヨハ 5:5)。

3A 命を持っている確信 13

¹³ 神の御子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです。

ここでヨハネが、「**分からせるため**」という言葉でこの手紙のまとめになっているような気がします。ヨハネは、御子の名を信じている人々が、異端や迫害などの猛威の中で、それでも、守られているのだよということを知ってもらうために書いていると思われます。

分かるためという言葉は、他にもいくつかの箇所では語っていました。「1:4 **これらのことを書**

¹ <https://www.premierchristianradio.com/Topics2/Church/Apologetics/The-convert-Why-I-left-Islam-to-follow-Jesus>

き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。」御子にあるいのちにあって、喜びに満ち溢れるためです。そして、「2:1 私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。」とも書きました。霊と肉を分けて、肉で何を行っても関係ないとする異端がはびこっていたことを思い出してください。その中で、御子のいのちにあって、私たちは罪を犯すことができないことを話しています。そして、ここです。永遠のいのちを持っていることを、分かってもらうのです。それが、この手紙の目的であり、私たちには何度となく確認が必要であり、確信が必要です。御子の中にこそいのちがあり、この方をしっかりと持ち、保っていなければいけません。

主は、同じヨハネに啓示された黙示録において、何度となく「勝利する者には、いのちが与えられる」と約束しておられました。エペソにある教会に対して、「2:7 勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」と言われました。スミルナの教会には、十日間の苦難があるけれども、「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」と言われました(2:10)。そして、サルデイスの教会には、「わたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。」と言われました(3:5)。このように、永遠のいのちがあることを確信し、この方を信じることに忍耐を働かせ、その行き着くところは、永遠に神とともにいることなのだ、ということでもあります。

そして私たちが、今、いのちある生活を歩むのは、御子との交わりにこそあるのだということですね。祈り、みことばの時間、そして教会を大切にしていきたいと願います。